

安全安心再考

向殿 政男

● 築地の豊洲への移転問題について

築地市場と言えば、世界最大級の水産物や青果を中心とした東京都の大卸売市場である。大変魅力ある場所であり、私も時々、お寿司を食べに場外を訪れる。歴史ある築地市場も老朽化したり手狭である等の理由で豊洲に移転することが決まり、移転先の豊洲市場がほぼ出来上がった状態で、現東京都知事が移転に待ったをかけた。豊洲の土壤汚染のデータがまだ出そろっていないからという理由からである。その直後、盛土をすることになっていた地下の一部が知らない間にコンクリートに囲まれた空間に設計変更されていたとか、前の土地所有者との間で土地汚染の浄化費用分担に絡み売買経緯に疑惑があるとか、様々な問題が出され、元都知事をはじめとした過去の関係者の責任を問うという事態に発展した。その後、土壤汚染のデータが明らかになり、地下水で環境基準（飲み水基準）を超えた数値が出たが土壤汚染対策等専門家会議は安全性には問題ないと宣言している。それにもかかわらず、マスコミや現都知事の関心事は、この取引や決定経過の疑惑の責任追及へと向かっていった。

責任を問われている元都知事からは、これらの疑惑問題に関して、安全と安心の問題を混同しているとの発言があった。その趣旨は、汚染土壌地域をコンクリートで囲い、地下水を使わなければ、専門家の言うとおり、豊洲市場は安全である。さらに安心のために、土壌とコンクリートの間に盛土を行い、地下水を浄化して飲み水基準まで達成できるとした。その安心部分が今回完全でなかったからと言って、安全に問題があるように報じて移転を止めて関係業者に大きな損害と迷惑をかけるのはおかしい、といったことであると推測される。

● 安全について

一般に、安全とは、「危険でないこと」であり、科学的、客観的に判断されるものと考えられている。しかし、現実には、利便性のあるところ絶対安全はあり得ず、「必ずある程度の危険性（リスク）は存在している」。この「危険でないこと」と「必ずある程度の危険性（リスク）は存在している」こととは、矛盾していると解釈すると世の中に「安全」などというのは理想であり、現実にはあり得ないことになる。

ISO/IEC Guide 51⁽¹⁾ という国際安全規格では、安全とは、「許容できないリスクがないこと」と定義している。安全といっても許容可能なリスクが残留している、という考え方である。初めから、絶対安全（リスクゼロ）は、放棄している。ここで問題なのは、許容できるリスクとは、どのような大きさのリスクなのかということである。Guide 51には、許容可能なリスクの定義も書いてあり、「現在の社会の価値観に基づいて、与えられた状況下で、受け入れられるリスクのレベル」となっている。時代の価値観により異なり、国によって、さらに、使うのが専門家なのか、素人なのか幼児なのか等によっても異なるとしている。許容可能なリスクのレベルは、与えられた状況下で変わるものであり、その大きさは一意的に決まらない。例えば、ある人にとっては安全であるが、他の人にとっては安全ではないということがあり得て、価値観によって異なるということである。安全はすべて科学的に判断できるというのは正しくない。現実には、人間の価値観や主観が絡んでいて、決して、科学だけでは決められない。ただし、どのようなステップを踏んで、どのような形で合意され、どのようなレベルで決まったかということを開示しておくことが重要であり、この意味からは、安全には客観性が重んじられる必要があると考える。

● 安心とは

一方、安心の方はどうだろうか。安心は不安の反対語、安心するかしないかはどう見てもその人の価値観、主観、経験等に依存している。

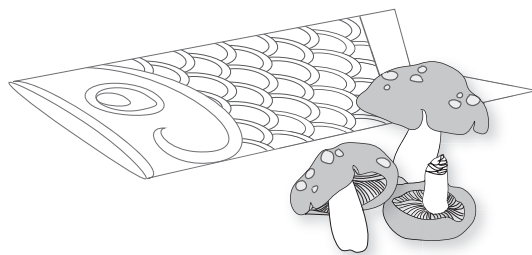
今、我々は安心といえば皆、その意味は理解できる。安心に相当する英語は peace of mind という人もいるが、安心は、どうも英訳できない日本独特の概念のような気がする。

安全と安心は明らかに異なった概念である。しかし、安全に科学的な面と主観的な面とがあると同時に、安心だってすべて主観で決められないだろう。他の人の安心が理解できるということは、実は人類共通に生理学的に安心に導く構造があり、安心にも生理学的な面から科学として解明できる部分があるはずである。安全も安心も科学的な面と主観的な面とをもっているが、その比率が大きく異なるだけで両者は連続していると考えられる。

製品を買ったり使ったりしている一般のユーザは、実は安心を求めている。どのように安全が構築されているかなどと言うことにほとんど興味はないし、興味があっても理解できないのが普通である。製造メーカーや国は安全を追究していて、一般ユーザは安心を求めている。このギャップが問題なのである。

●安全と安心をつなぐもの

安全でないものを安心させて使わせる、というのはまさに詐欺師のわざだろう。ものづくりの世界では、まず、安全なものを作って、それを安心して使ってもらおうというのが順序である。しかし、いくら安全であっても安心してもらえない場合はいくらでもある。BSE（牛海綿状脳症）問題がその典型であろう。遺伝子組換え食品も同じかもしれない。BSE問題の場合、2001年に我が国で騒がれ、科学的に安全であることがわかっているのに安心のために膨



大な金額と手間をかけて国内牛全頭検査を実施した。なんと今年2017年4月まで48か月齢超国産牛の全頭検査はやめられなかったのである。莫大な損失は、税金等を通じて国民全体に跳ね返ってくることになる。このように安全であっても消費者の安心を得るのは難しいことがわかる。私は、安全を安心につなげるのは信頼であり、“安全×信頼＝安心”を安全安心の方程式と呼んでいる。安全でないものは全くダメであるが、例えば安全であっても、安全を確保・構築している組織や人間が信頼されない限り、安心につながらない、という意味である。信頼を得るには、少なくとも、良い情報も悪い情報も隠さず、嘘をつかず開示して、愚直なまでに誠実に、時間をかけて消費者と向き合うことしかないと考えられる。

●豊洲市場問題における安全安心

今回の豊洲市場移転問題を巡っては、私は一つの違和感を覚える。すぐにやるべきことは、安全に関する調査と安全であることの宣言であろう。責任追及はその後でゆっくりと時間をかけてやればよい。順番が逆で、責任追及ばかりが表に出てきて、先にやるべき本来の安全問題がないがしろにされている。元知事や元担当者の例えば手続き上の疑

惑等々を含んだ信頼問題を表に出して、信頼を揺るがすことによって、この安全問題を安心問題に換えてしまった。ここまでマスコミを通じて広まった不安は、もう、簡単には元へは戻らないであろう。あれだけ煽ると実被害や風評被害を含めて、民間の業者には甚大な損害が発生し、取り返すのに大変な時間と労力と費用が必要になる。被った損害額に関しては賠償されるかもしれないが、それは税金であり都民全体にはね返ってくる。

この問題は、安全安心問題よりは政治問題化している。もし、現都知事が政治的意図でこの問題に取り組んだのであれば、ひいては現都知事の信頼問題につながって、都政に対する不安はさらに大きくなるだろう。もうその時には、責任問題で片付くような簡単なものではなく、都民全体が大きな損害を受け、かつ、外からの信頼を大きく失うことにつながるだろう。このことは、安心問題を安易に取り扱ってはいけないことを如実に表している。

参考文献

⁽¹⁾ ISO/IEC Guide 51 (JIS Z 8051) : 安全面—規格への導入指針

[明治大学名誉教授]